

御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ

ヘブライ人への手紙 2 : 9 - 18



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年10月6日

聖霊降臨後第20主日

上野聖ヨハネ教会にて

今聞いた福音書の最後はこういう言葉でした。

「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」マルコ 10:9

これは結婚式で用いられる言葉ですが、それを今は少し広い意味にとってこう受けとめてはどうでしょうか——神はわたしたちを御自身に結び合わせてくださった。だからわたしたちはそれを離してはならない。

神とわたしたちをしっかりと結び合わせていてくださるのがイエス・キリストです。この方を「ヘブライ人への手紙」（ヘブル書）は「大祭司」と呼んで、その意味を詳しく伝えようとしています。今日の使徒書にはその言葉が1回だけ出てきました。

「それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となつて、民の罪を償^{つぐな}うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。」ヘブライ 2:17
イエスはわたしたちのために「憐れみ深い、忠実な大祭司」となられた、とされています。今日はこのことの意味を知りましょう。

「祭司」というのは神と人々を結び合わせる存在、神と神の民の間の仲立ちとなる重要な役割を担う人です。人々の抱える願い、苦しみ、祈りを心に深く受けとめて、それを神にしつかり届ける。人々の願いと感謝のしるしである捧げものを受け取

って神にささげる。人から神へと執り成しをする役です。もう一方、必要に応じて人に神の教えを伝え、人々を祝福する。神から人への橋渡しをする役です。

旧約聖書では、モーセの兄弟アロン、またハンナの祈りを聞いて祝福したエリなどが代表的な祭司です。新約聖書のクリスマス物語には、イエスの母となるマリアが信頼する親戚のエリサベトを訪ねる場面があります。そのエリサベトの夫ザカリアが、エルサレムの神殿に仕える祭司でした。

祭司は、人々が生涯信仰生活を続けていくために、なくてはならない重要な存在のはずでした。けれども、祭司も人間なので弱さを抱えています。弱いだけならまだよいのですが、中にはその立場を利用して権力欲、貪欲に走る者、悪を行う者が出て来ます。神と人々の間を結ぶのではなく、その反対に神と人々との間に壁となってしまう場合がある。その最悪の例は、イエスを捕らえて死刑にするように動いた当時の大祭司アンナスとカイアファでした。

このような祭司、大祭司では人は救われない。そこで神さまは、まったく別の、ほんとうの祭司を立てられた。神と人々の間に立って、神の愛と神の意志を人々に注ぎ込み、また人々の願いや苦しみを深く受けとめて神へと橋渡しをする、真の大祭司を神は立てられた。それがイエス・キリストだ——これが、

ヘブル書がわたしたちに語りかける内容です。それを今日の聖書から聞くことにしましょう。大きく三つのことが語られています。

一つ目は 11 節途中からです。

「イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、『わたしは、賛美します』と言い、また、『わたしは神に信頼します』と言い、更にまた、『ここに、わたしと、神がわたしに与えてくださった子らがあります』と言われます。」ヘブライ 2:11-13

イエスはわたしたちを疎遠な者とせず、ご自分の兄弟、姉妹と呼ばれる。またわたしたちのことを、「**神がわたしに与えてくださった子ら**」と言われます。わたしたちはイエスにとって大切な弟であり妹、また大切なご自分の子。イエスはそのようにわたしたちを呼んで、わたしたちを引き寄せてくださるのです。

二つ目は 14 節からです。

「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。」 2:14

「子ら」とはわたしたちのことです。わたしたちは血と肉を備えている。だからこそ人間として生きているのですが、それはわたしたちが疲れ、傷つき、衰え、死ぬ存在だということでもあります。イエスもわたしたちと同じになられた。イエスも血と肉を持った人間として、疲れ、傷つき、衰え、死ぬ者とな

られた。そのようにわたしたちの弱さや傷、衰えをわかってくださる、感じてくださるだけではなく、ご自身がそれを経験するほどまでにわたしたちと一つになられた、ということです。

その後、不思議なことが書かれています。

「それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。」 2:14-15

イエスはわたしたち人間の弱さ、傷、死をご自分のものとすることによって、自ら傷つき死なれた。それによって、死をつかさどる悪魔を滅ぼし、わたしたちを死の恐怖から解放された。イエスの死がわたしたちを救う。イエス・キリストの十字架に命があるのです。

わたしたちは頼りなくふらふらしている。しかしそのわたしたちのために、イエス・キリストの十字架は断乎としてしっかりと立っているのです。

そうであるなら、わたしたちには希望があります。わたしたちがどんな心配を抱えていても、困難を抱えていても、自分の現在を、また自分の最後も、この方にゆだねることができます。

三つ目は17節からです。

「それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償^{つくな}うために、すべての点で兄弟た

ちと同じようにならねばならなかったのです。」2:17

ここで大切なのは、イエスがわたしたちの傍らに、わたしたちの側^{がわ}に立っていてくださる、ということです。イエスは、わたしたちのために、わたしたちの側^{がわ}にあつて、神の前に立たれる。イエスはわたしたちを守り、生かそうとされる「**憐れみ深い、忠実な大祭司**」です。イエスがわたしたちの罪も死もご自身に引き受けてくださるので、わたしたちは何も恐れることはない。神はイエスのゆえに、わたしたちを完全に受け入れ、赦し、清めて、愛を、祝福を満たしてくださるのです。

最後 18 節にこう言われています。

「事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。」2:18

イエスは公に活動を開始される前に、荒野で 40 日の試練を受けて苦しまれました。また生涯の終わりに、ゲツセマネで「死ぬほど悲しい」と言われ、試練を受けて苦しまれました。そして十字架は最大の試練でした。

「御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができる」。

わたしたちのために本気で祈ってくださる方がある。イエスは命がけでわたしたちのために祈り、支えてくださるのです。これが、わたしたちの救い主、大祭司イエス・キリストです。この方によってわたしたちは神さまとしっかりと結ばれていま

す。わたしたちはこの方に支えられて生きていきます。この方を信じて従います。

もしわたしたちが人のことを心配して祈るなら、また少しでも人の力になろうとするなら、イエスはそれを喜ばれます。それは大祭司イエス・キリストの働きに協力する、参加することになるからです。

祈ります。

主イエスさま、あなたがわたしたちのために憐れみ深い大祭司でいてくださることを感謝いたします。あなたに守られ祈られ支えられて、わたしたちもいくらかでもあなたの働きに加わることができるようにしてください。尊い主のみ名を賛美します。アーメン